

山梨県中巨摩郡若草町

向第1遺跡

富士川西部広域農道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査

2002

若草町教育委員会
山梨県峡中地域振興局農務部

山梨県中巨摩郡若草町

向第1遺跡

富士川西部広域農道建設に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査

2002

若草町教育委員会
山梨県峡中地域振興局農務部

例　　言

- 1 本書は、山梨県中巨摩郡若草町十日市場に所在する「向第1遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査区は中巨摩郡若草町十日市場846-2に所在する。
- 3 発掘調査は、富士川西部広域農道（農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業富士川西部中央2期地区若草第2工区）建設工事に伴って行った。
- 4 調査は、山梨県峠中土地改良事務所（現山梨県峠中地域振興局農務部）の委託を受けて、若草町教育委員会が主体となって行ない、田中大輔（若草町教育委員会社会教育課）が担当した。
- 5 発掘調査に従事したのは以下の方々である。

飯室めぐみ・石川 久子・今村 貞雄・加藤 秀代・佐久間篤子
佐久間春江・佐久間 等・真道みゆき・鈴木 政一・原田 佳子
福島 祥子・山本三重子（敬称略・50音順）
- 6 調査は、平成12年7月24日から平成12年9月14日にかけて行い、実調査日数は25日であった。
- 7 調査範囲は、試掘調査の結果に基づき、予定調査面積410m²をもって設定したが、実調査面積は303m²に留まった。
- 8 整理調査は平成13年度に行い、本書の編集執筆は田中が行った。
- 9 本書に掲載した地図は、若草町発行1/10,000「若草町全図」、国土地理院発行1/50,000「甲府」・「駿沢」である。
- 10 発掘・整理調査に際しては、以下の諸氏、諸機関にご教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

齊藤 秀樹・新津 健・能代 幸和・広瀬 和弘・保阪 太一
山梨県教育委員会学術文化財課・山梨県埋蔵文化財センター（敬称略・50音順）
- 11 本書に係る出土遺物並びに写真・記録図面類は若草町教育委員会において保管している。

凡　　例

遺構凡例

- 1 遺構の縮尺は、全体測量図1/200、竪穴住居址1/40、窓1/20、その他の遺構1/80とした。
- 2 遺構断面図中の「271.0」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。
- 3 挿図中の北方位は真北である。磁北は $6^{\circ} 10'$ 西偏する。遺構図版・挿図は第5図を除き全て真北乃至真西を上に組んだ。
- 4 遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、煩雑になる場合は省略した。これ以外に用いたスクリーントーン、ドットマークの凡例は各々使用された挿図中に示した。
- 5 本書においては、便宜上遺構に以下に示すような略称を用いた。

SI 竪穴住居址

SD 溝状遺構

SX 不明遺構／竪状遺構

SK 土坑（土に穿たれた穴で上記以外としたもの）

遺物凡例

- 1 遺物の縮尺は全て1/3で示した。
- 2 図示した遺物は、遺構平／断面図中に遺物番号をもって出土位置を示した。遺物挿図中に図示してあるのに遺構平／断面図中に示されていないものは遺構一括で取り上げた遺物である。
- 3 土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半1/4を切り取った状態で左側1/2に外面、右側1/2に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、 180° 回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。
- 4 須恵器は断面を黒く塗りつぶした。灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施して、施釉範囲を別のスクリーントーンで示した。
- 5 回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した図を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器、及び折影図に關しても同様の作図に依った。
- 6 遺物の欠損部分の復元に際しては、補強を主目的とし、遺物の保持に必要な部分のみをエポキシ樹脂によって補填するに留めた。
- 7 脆弱な遺物については整理調査時において、セルロース系接着剤の有機溶剤溶液に含浸させることにより強化をはかった。
- 8 遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大値である。
- 9 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修／翻日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』に準拠して付与した。
- 10 挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

本文目次

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	4
第1節 自然地理的環境.....	4
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境.....	6
第3節 調査区の土層.....	8
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物.....	9
第1節 堪穴住居址（SI）.....	9
第2節 溝状遺構（SD）.....	10
第3節 畝状遺構／不明遺構（SX）	10
第4節 土坑（SK）	11
第Ⅳ章 総 括.....	14
参考引用文献.....	16
図 版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	3
第2図 滝沢川河床縦断面図	5
第3図 滝沢川流下方向模式断面図	5
第4図 調査区の位置と周辺の遺跡	7
第5図 基本層序	8

表目次

第1表 土坑(SK)計測表	12
第2表 SI01出土遺物観察表	13
第3表 SD01出土遺物観察表	13
第4表 出土遺物重量表	13

図版目次

図版1 調査区全体測量図	
図版2 SI01測量図／SI01出土遺物実測図(1)	
図版3 SI01竪測量図／SI01出土遺物実測図(2)	
図版4 SD01測量図／SD01出土遺物実測図	
図版5 SK測量図(1)／SX01(1)測量図・SX03測量図	
図版6 SK測量図(2)／SX01(2)測量図・SX02・SD02測量図	
図版7 調査区遠景(東より)	
図版8 調査区全景	
図版9 SI01(東より)／SI01竪(東より)	
図版10 SD01(西より)／SD01(北西より)	
図版11 SX01／SX02	
図版12 調査区(西より)／SI01・SX03遺構確認状況(南より)	
図版13 SI01出土遺物／SD01出土遺物	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成10年10月、若草町教育委員会は、山梨県峡中土地改良事務所（現山梨県峡中地域振興局農務部）より当該事業計画の実施に際して埋蔵文化財の有無について照会を受けた。若草町教育委員会では計画地内的一部が、埋蔵文化財包蔵地（向第1遺跡）に含まれるため、協議が必要な旨回答した。

これを受けて平成10年10月6日、山梨県峡中土地改良事務所、若草町教育委員会、若草町産業振興課（現産業課）は協議を行い、該当部分の試掘調査を行なうことで合意した。

これを受け平成10年10月21日、山梨県峡中土地改良事務所長は、文化財保護法57条の3に基づく通知を若草町教育委員会教育長に提出。翌22日、若草町教育委員会教育長は山梨県教育長へ同通知を進達し10月23日には、県教育長より峡中土地改良事務所長へ発掘指示があった。

当初平成10年度中に試掘調査を行なう予定であったが、用地買収の進捗及び建設事業計画の変更等により遅延し、試掘調査は平成12年6月15日に実施した。

試掘調査実施に際し、今回の事業計画範囲は向第1遺跡の北端に位置し、近年まで常習洪水河川であった滝沢川に接することからも遺構・遺物の検出される可能性は低いものと推察された。しかしながら、試掘調査の結果、洪水堆積層に一部を削られながらも、砂礫層下に奈良・平安時代の遺物包含層並びに遺構が良好に遺存していることが判明した。そこで山梨県峡中土地改良事務所長および若草町教育委員会教育長は、協議の上、この部分について埋蔵文化財の記録保存を図ることで合意し、平成12年6月30日、各々『農林漁業用揮発油税源身替農道整備事業富士川西部中央2期地区若草第2工区建設工事に伴う「向第1遺跡」発掘調査に関する覚書』を交わし、今回の発掘調査に至った。

なお、当該農道建設事業の内、今回調査対象となった部分については大部分が、滝沢川の右岸河川境界内を通る。しかしながら実際に河川境界内を対象として掘削調査を行うことは防災上、手続上困難と判断し、調査対象から河川境界内を除外している。

第2節 調査の方法と経過

発掘調査は平成12年7月24日に開始した。確認された遺構の詳細については後述するが、今回の調査では竪穴住居址1軒、溝状遺構2条、土坑36基、畝状遺構群等を検出した。調査区では所々で遺構確認面を抉るように洪水流の痕跡が確認されたが、この洪水層の覆土である砂礫層の除去は人力に依らざるを得ず苦慮した。

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように国家座標第Ⅳ区を用いて5mメッシュを基本とするグリッドを設定した。従って5mメッシュの南北線は真北、真南に対応する。またその際の基準点並びに水準点の設定はGPSに依った。

5mメッシュの各線（ライン）の名称は、南北に走る線を東から西にA・B・C…とアルファベットで、東西に走る線を北から南に1・2・3…と算用数字で表し、それぞれA-ライン、B-ライン、1-ライン、2-ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を、（西へ並ぶアルファベット）-（南へ並ぶ算用数字）のように表して、A-1ポイント、B-2ポイントなどと呼称した。各区（スクエア）

の名称はその区画の北東隅のポイントの名称をもってあてた。因みに本遺跡の仮想原点であるA-1ポイントの座標はX=-44055.000、Y=-2040.000である。

表土は重機を用いて除去した。試掘調査の結果から調査区の土層は度重なる洪水によって所によっては地山が大きく流出し、基本層が欠損している部分も見られ、複雑な堆積状況を呈することが推察された。従って表土除去に際しては、適宜試掘溝を設けこれに対応することとした。

重機による表土の除去作業に平行して、人力にて確認面を精査し遺構の確認作業を行った。確認された遺構については人力にて覆土を除去した。発生土の排出に際してはベルトコンベヤー等を用い、作業の効率化を図った。

遺物の取り上げに際して、竪穴住居址においては全点出土位置を記録することを基本とし、平板を用いて遺物の出土位置を記録した。やむを得ず原位置を保てなかった遺物や、他の遺構については遺構一括で取り上げた。

竪穴住居址の調査については四分割法を採り、二本の直行するセクションラインを設定して市松模様状に土層観察用のベルト（以下セクションベルト）を残しながら覆土を除去した。覆土の除去に際しては、セクションベルト等を観察しながら、新しく堆積した層から順次一層ごとに除去することを基本とし、覆土内での遺物の出土状況が把握できるよう努めた。セクションベルトは、土層断面図を1/20で作成した後取り除いた。竪についても適宜セクションベルトを設定し、住居址覆土同様の調査方針を探った。竪の測量は簡易造方に依ったが、平断面図共1/10で作成した。

溝状遺構・畝状遺構等については、遺構と直交するように、適宜セクションベルトを設けて覆土を除去した。住居址同様、セクションベルトは土層断面図を1/20で作成後除去したが、土層の観察後野帳への記録をもって図面に代えた場合がある。

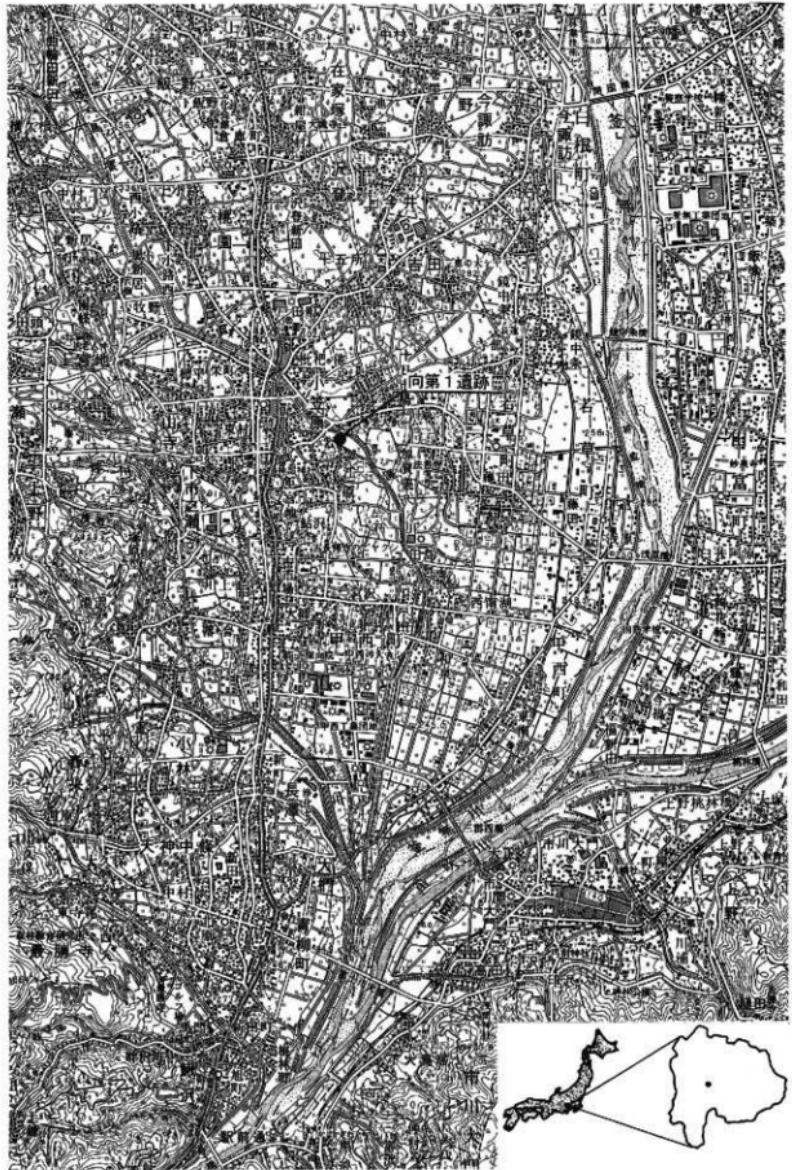
土坑については、基本的にプランを半裁して表土を除去し、堀り残した1/2の覆土によって土層の堆積状況等を観察した。また溝状遺構・畝状遺構と同様、土層の観察後野帳への記録をもって図面に代えた場合がある。

なお、今回の調査において遺構番号は、遺構の種別ごと検出順に付与していくが、遺物の出土しなかった土坑については、発掘調査中に遺構番号を付さず、整理調査時に適宜番号を与えた。その際、発掘調査時に付与した土坑の遺構番号を次のとおり変更した。調査時にSK01-02としたものは、本報告書においてSK28-32とそれぞれ名称を変更した。ただし、この場合でも、遺物への注記等は旧番号で行っている。

上記した以外の遺構の測量については、ラジコンヘリを用いた空中写真測量に依ったが、必要に応じて平板測量や簡易造方測量を援用した。

当初、平成12年8月31日までに調査を終了する予定であったが、天候不良、並びに発掘調査を行った時期が果樹栽培の盛んなこの地域の農繁期にあたり作業員の確保が困難であったことから、協議の上平成12年8月30日に期間変更覚書を取り交して、調査期間を延長、9月14日に全調査を終了し、9月20日、遺失物法第13条に基づく、埋蔵文化財発見届を小笠原警察署長宛に行った。

整理調査については、平成13年5月7日、別途覚書を締結し、本報告書刊行に至った。



第1図 遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然地理的環境

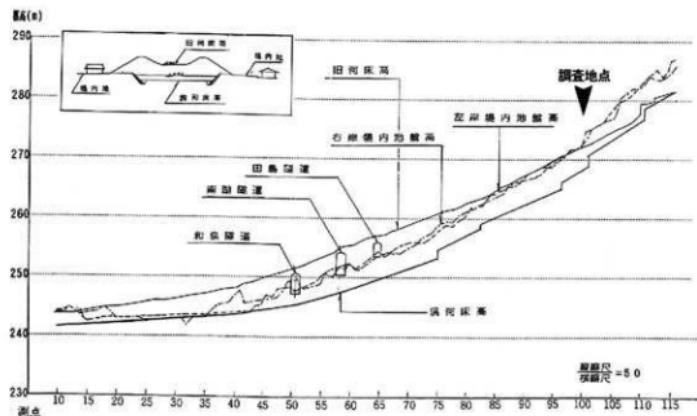
中臣郡若草町は、甲府盆地の西部、釜無川（富士川）の右岸に位置し、町域の東辺は釜無川に、西辺は櫛形山累層から流下し釜無川に合流する滻沢川に面される。町域は日本有数の扇状地とされる御勘使川扇状地の扇尖から扇端部、及び釜無川の氾濫原に広がっており、町内に山地がなく町全体が極めて平坦であることが地形的特長ということができる。しかしながら、一見平坦に見える町域も御勘使川扇状地上に残る微地形や釜無川の沖積低地の他、滻沢川による御勘使川扇状地上の2次扇状地、土石流堆などの小扇状地上の微高地など、微視的にみれば幾つかの地形に分類することが出来る。

向第1遺跡（若草町遺跡No41075）は、その西辺を滻沢川に面される若草町域にあって、例外的に滻沢川の右岸に飛地状に存在する部分のほぼ全てをその範囲に含め占地する。対岸には滻沢川扇状地の下に潜り込む御勘使川扇状地扇端部が迫り、目前には釜無川氾濫原が広がる。また、後背の櫛形山からは、滻沢川が膨大な砂礫を包含しながら流下し、本遺跡が占地する滻沢川扇状地を形成している。

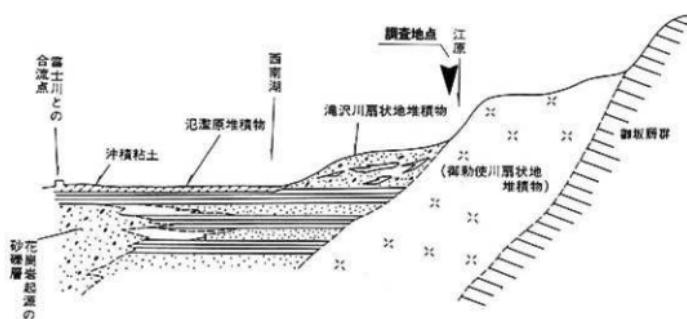
櫛形山累層の最高峰である櫛形山（2051.7m）に端を発した大和川・高室川・入増川・塩沢川・深沢川は流下しながら合流して滻沢川となり、若草町及び近接する甲西町を経て富士川に至る。滻沢川に至る各河川は高峻な山岳から流下するためその流路延長の短いことと相俟って平均川床勾配が非常に急であり、「甲斐国志」には「水源ハ高尾山ノ南ニ發シ平岡・上宮地ノ間ヲ東流シテ瀑布ヲナス。因テ川ノ名トス」とみえる。

また山梨県西部を南北に糸魚川—静岡構造線（フォッサマグナ）が走り、そこから派生する無数の断層線が地滑りを生じやすくしている。滻沢川に至る各河川はこの脆弱な御坂山累層を流下するので、出水の都度多量の土砂を伴って流下し、下流緩流部に堆積して若草町・甲西町内に典型的な天井川を形成した。このため、この付近では近年まで川床が屋根より高く、川床下に隧道を通して通行する状況であった。このような河相から、滻沢川は古来より水害の頻発する河川として知られ、近世以降いくつかの大規模な改修工事が実施されてきたが、いずれも滻沢川を抜本的に改修するまでには至らなかった。しかしながら、昭和46年より平成2年まで実に19年にも及ぶ歳月をかけた所謂「第2次改修工事」（第2図）によって最大7mにも及ぶ川床の切下げが行われて抜本的に天井川が解消し、築堤河道から掘込河道への変換がなされて近年ようやく安定した河相を見せるに至った。

今回の調査区は滻沢川右岸に接し、微視的に見れば滻沢川扇状地において最後に形成された扇状地上の微高地（自然堤防）に立地する。また、第2図に示した滻沢川河床縦断面図によれば、改修前の滻沢川においては、まさに今回の調査地点付近を境に川床と両岸のレベルが逆転しており、今回の調査区がちょうど滻沢川扇状地の扇頂にあたることがわかる。遺跡は、頻繁に氾濫を繰り返し、近年まで所謂天井川であった滻沢川の右岸に接しながら、平安時代を中心とする遺物の濃密な散布が認められることが知られる。遺跡は町境を超えて近接する甲西町江原地区に広がる可能性が高く、甲西町域では古墳時代後期の遺物散布も見られるという。滻沢川を挟んだ対岸には若草町溝呂木道上第5遺跡、櫛形町枇杷B遺跡が近接し、弥生時代中期から平安時代前半まで連続と集落の営まれた痕跡が確認されている。



第2図 滝沢川河床縦断面図（「若草町誌」より転載）



第3図 滝沢川流下方向模式断面図（「若草町誌」より転載）

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

今回の調査区は、第4図に示した(17)にあたり、滝沢川を隔てた対岸北側には、御勅使川扇状地の扇端部から扇央に連なる若草町・櫛形町の遺跡群が占地する。また遺跡の対岸東側及び南側には、滝沢川の2次的扇状地上の微高地を中心に多くの遺跡が分布することが明らかになっている(以下遺跡名の後ろの番号は第4図中に図示した遺跡位置と一致する)。

向第1遺跡の対岸北側には、御勅使川扇状地の扇端に沿って古墳時代後期から平安時代を中心とする集落址、中世常滑焼大壺を埋設した土坑などが検出された溝呂木道上第5遺跡第I・II地点(13・12)、この遺跡に近接し、同一集落と考えられる枇杷B遺跡(11)、古墳時代後期・奈良平安時代を中心とする集落に伴って腰帶具などが検出された新居道下遺跡(14)などが占地する。各遺跡とも集落の継続時間が相対的に長く、その多くが時代を跨って検出されており、ここに占地する遺跡群からは弥生時代以降中世まで連続と人間の営為の痕跡を辿ることができる。

御勅使川扇状地のやや内側(扇央)に入ると古墳時代前期及び平安時代の集落が発見された村前東A遺跡(3)・角力場第2遺跡(5)、寺部村附第11・12・6遺跡(6~8)、同じく古墳時代後期の遺構が検出された前原G遺跡(4)があり、この辺りに古墳時代前期の遺構が濃密且つ広汎に分布することが明らかになりつつある。特に村前東A遺跡からは、100軒を超える該期住居址が検出されており、古墳時代前期の拠点的集落として注目される。また村前東A遺跡の北側には、弥生時代後期の方形周溝墓群が検出された十五所遺跡(2)が占地する。加えて寺部村附第6遺跡(8)からは、古墳時代中期の円形周溝墓が3基検出されており、岐阜地方の古墳時代の動向を探る上で注目される。

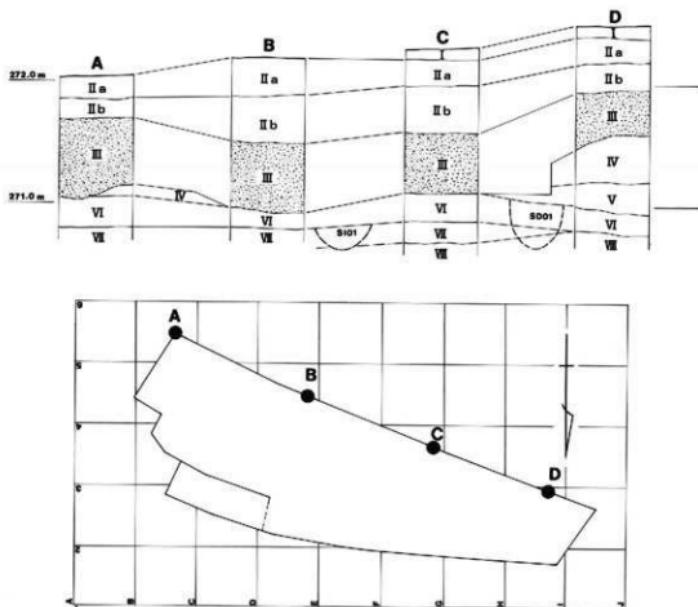
遺跡の滝沢川を隔てた東側・御勅使川・滝沢川複合扇状地上の微高地には、古代末から中世にかけてこの地で勢力をもった加賀美氏の館跡と伝えられる古刹「加賀美山法善寺」がある。また、古代末から近世の水田址と共に法善寺の塔頭であった「福寿院」関連の遺構が検出された二本柳遺跡(15・16)が調査されている。二本柳遺跡では特に、甲西バイパス地点から中世の木棺が良好な状況で検出され、当時の葬送儀礼を検証する上で貴重な事例となった。また、周辺には条里型地割が広く遺存しており、現在でも中世的空间を色濃く残す町並みが見られる。

遺跡の南側にも同様に御勅使川・滝沢川複合扇状地が広がり、微高地を中心として弥生時代中後期の小区画水田が検出された向河原遺跡(18)を始めとして油田遺跡(19)、中川田遺跡(20)、大師東丹保遺跡(21)などで水田址や祭祀跡が検出されている。特に大師東丹保遺跡からは洪水堆積物に埋没した古墳が壺型埴輪を伴って検出され注目を集めた。

この他に近年、御勅使川・滝沢川扇状地及び沖積低地において油田遺跡を中心に溝呂木道上第5遺跡、村前東A遺跡等で、広汎に縄文最終末から弥生中期前半の遺物の出土が認められ、台地上から扇状地末端乃至沖積低地への進出という、稻作の開始と運動した遺跡の動態を探る上で今後調査事例の蓄積が期待される。また、これまで遺構の存在が確認されていなかった、釜無川の氾濫原において、御崎藏入遺跡(10)の調査が行われ、平安時代の祭祀跡と共に近世の道状遺構や小橋、水田址等が洪水堆積物に被覆され、良好な状況で検出された。今後これまで遺跡の存在が認められていなかったこれら地域から新たな遺跡が発見される余地があり、注意を要する。



第4図 調査区の位置と周辺の遺跡



第5図 基本層序

第3節 調査区の土層

今回の調査区で確認された土層は以下のとおり。また土層柱状図を第5図に示す。

- I 層 表土耕作土層（客土）。黒褐色。
- II a 層 黄褐色土。砂礫多く含み締まらない。
- II b 層 黄褐色土。締まる。
- III 層 砂礫層。洪水堆積層。所によってⅦ層に達する。
- IV 層 褐色土。
- V 層 黒灰色砂礫質土。調査区西半でのみ確認される。炭化物焼土粒を含有し、平安時代前半の土器（甲斐型土器）を多く包含する。
- VI 層 黒褐色土。奈良・平安時代の土器を包含する。
- VII 層 黄灰色粘質土。遺構確認面。
- Ⅷ 層 黑灰色粘土。黄灰色粘土ブロックを多く含む。

調査区壁の観察から、平安時期の遺構はVI層上面より掘込まれるものと推察されたが、ここで確認されたのは地山と覆土の土質が近似していることから困難であったため、VII層まで確認面を下げて調査を行った。結果的に奈良時代以降の遺構を1面で確認することとなった。

第III章 検出された遺構と遺物

第1節 穫穴住居址 (SI)

S I 01 (岡版2・3・9・13・第1表)

遺構

F-3区において検出され、SK19~23を切る。本址南西コーナー付近は調査区外にある為全容を明らかに出来ないが、規模は確認面において東西2.97m、南北3.58m、床面において東西2.84m、南北3.42mを測り、形状は南北に長辺を持つ長方形を呈するものと推察される。竈を有する壁と直行する方向を主軸とした場合、本址の主軸はN-104° -Wをとる。確認面から床面までの深さは最大で0.28m、床面の標高は270.58m程になる。

床面には貼床を施した痕跡はなく、顯著な硬化面も見受けられないが、所々に硬化した黄灰色粘土ブロックが散る。

住居址覆土は、自然堆積で6層に分けられ、周壁際の一次堆積後、主に北側から基本層序VI層を出自とする土砂流入によって埋没したものと見受けられる。

周溝や柱穴と思しきピットは検出し得なかったが、竈袖南脇及び住居址南壁中央に接してそれぞれ1基のピットを検出した。竈脇のピット(P-1)は床面からの深さは0.13m(底面標高270.45m)南壁で検出したピット(P-2)は床面からの深さ0.08m(底面標高270.50m)をそれぞれ測る。規模形状等は、遺構の一部が調査区外にあるため明確に出来ない。

竈は、住居址西壁中央付近に1基構築される。煉瓦部分に崩落が見られるものの、両袖が残り遺存状態は良い。規模は現存値で全長1.38m、横幅2.05m、焚口幅0.88mを測る。

火床にはあまり被熱した痕跡が残らないが、両袖内側は著しい被熱によって赤変している。主軸は住居址西壁に直交し、住居址主軸とはほぼ同じ傾きをとる。袖は黄灰色粘土で構築され、石材等の利用はみられない。因みに、この地域において、西壁に竈を構築することは極めて稀な事例といえる。

なお、住居址北東コーナーにおいて、住居址外側に張り出したような段差と焼土・炭化物を多く含んだ土層(覆土第3層)が住居址内に流入してくるような堆積状況をとらえた。当初、竈の存在を念頭に置いて調査を行ったが、覆土を除去しても、袖等構築上、堀方の痕跡、壁・床面の被熱などが全く見られず、竈の存在を示す積極的証拠は得られなかつた。

遺物

遺物は竈内で、竈の破片が比較的まとまって検出されたものを除き、殆どが住居址の覆土に乗って流入したような状況で検出された。細片が多く相対的に見て出土量も少ない。竈以外で検出された遺物の分布は、住居址の北東1/4に集中する。

検出された遺物は、基本的に土師器の壺・杯に限られるが、岡版2・13に遺物番号1として示した遺物については、極めて軟質な焼成、φ10mm程の小礫が混入するなど粗い胎土、非常に歪んだ成形で器種器形を想定し得ない。また、覆土第1層には、細片のため図示し得なかつたが、平安時代の所謂甲斐型土器が3片程混入しており、本址埋没の時間的経過の一端を提示する。

第2節 溝状遺構 (SD)

SD01 (図版4・10・13・第2表)

遺構

グリッド線Gライン以西で検出された。南西方向に走る1条と、これからほぼ直角に分岐乃至交差して南東方向に走る1条によって構成される。プランはT字形に分岐するが一体のものとして捉え、遺構名を付与した。南西に走る1条からは連続した凹凸(ピット)が見られ、南東方向に走る溝については3条が折り重なるように検出されており、繰り返し開鑿が行なわれたことが推察される。

主軸を東西方向にとる1条は、幅1.0~1.2m、調査区において検出した長さは7.4m程だが、両端が調査区外に逃げるので、全长は把握できない。確認面からの深さは、0.13m程で、長径0.25m、短径0.10m、底面からの深さ0.05~0.10m程の長円形のピットが密に穿たれる。底面標高は、調査区北壁で270.72m、a-LINEで270.85m、調査区西壁で270.85mをそれぞれ測る。

主軸を南北方向にとるもう1条は、微視的には3条の溝が折り重なるように検出され、幅1.2~2.15mで南に向かうほど幅員を増す。長さは調査区内で約10m程を検出した。検出し得た深さ0.1~0.3m程で、底面標高は、東西方向溝との分岐部分で270.80m、b-LINEで270.68m、調査区南壁で270.59mと、南に傾斜する傾向が見て取れる。いずれの溝も覆土は基本層序V層質を主体とする。

遺物

これら溝の覆土からは、平安時代前半の所謂甲斐型土器、並びに灰釉陶器長頸壺等が検出された。検出された杯形土器の口縁部は、全て玉縁乃至降玉縁を呈し、壺形土器は所謂厚口口縁を呈するものが主体となる。

SD02 (図版6)

遺構

C-4区にて検出された。N-65°-E程の主軸をもって、北東／南西方向に伸びるものと推察されるが北側を洪水流に切られ、南側が調査区外に逃げるため明確に出来ない。検出された長さは3.1m、確認できた幅員は0.55~0.85m程で、確認面からの深さは0.25~0.30m、底面標高は東端で270.40m、調査区南壁で270.56mを測り、断面はU字状を呈す。覆土は、基本層序VI層質に占められる。

遺物

検出されなかった。

第3節 敵状遺構／不明遺構 (SX)

SX01 (図版5・6・11)

遺構

調査区の中央から東半を中心として調査区のはば全域で検出された。

構造、主軸方位等から3乃至4群の遺構が重なって検出されたものと推察される。想定したパターンは以下のとおり。

1群 直線的乃至やや湾曲しながらN-65~80°-Eに主軸をとる1群。調査区中央から東半を中心に分布。

2群 主軸がほぼ真北を向く一群。C-3区にて2条のみ検出。

3群 1群にはほぼ直行する方向に走る群。E-ライン以東で検出。

なお、これ以外に、調査区南西隅にて検出された小溝群がある（これをSX02とした）。

また、洪水流によって削平され、確認面に僅かにシミ状に確認される歟もあることから、既に消滅した歟も多いものと思われ、必ずしも今回の調査で検出された遺構のみをもって、遺構の旧景は推し量れない。また、これら各群の切り合い関係は判然としない。

各歎（小溝）の幅は0.2~0.4m、底面は所によって起伏に富むが、確認出来た深さは最大で0.25m。覆土は基本層序VI層を主体とし、VII層質の黄褐色粘土ブロックを含む。また、焼土粒・炭化物を所により含む。

遺 物

本址全体から出土した遺物は平安時代前半の所産と思しき土師器片僅か3片に止まる。いずれも小片にて図示し得ない。

S X02 (図版6・11)

遺 構

調査区南端B・C-5区において検出された小さい溝群。幅0.2~0.25m程の小溝が、複数重なり合つて遺構を構成する。確認面からの深さは0.1~0.15m程で、これら小溝同士の切り合い関係は把握できない。覆土は基本層序VI層質に占められる。

遺 物

検出されなかった。

S X03 (図版5・12)

遺 構

溝状の遺構と土坑が連結したようなプランを持つ。単に歎状の遺構と土坑が切りあつたものとも思われるが、両端が屈曲しコーナーを成すように見受けられたため、当初SI01の付属施設乃至竪穴住居址の周溝等が遺存したものと想定し遺構名を別に付与した。

遺 物

検出されなかった。

第4節 土 坑 (SK)

今回の調査では、図版5・6に図示した36基の土坑を検出した。

基本層序V層質の覆土を持つ土坑とVI層質の覆土を持つ土坑が確認されたが、V層質の覆土を有するのはSK01~04に限られ、数はVI層質の覆土を有する土坑が圧倒する。各々の土坑の計測値は第1表に示した。

掘建柱建物址を構成するような規則的配列、柱穴に比定し得るような覆土の堆積状況は認められなかったが、SK19~23、31や32のように、他の土坑や遺構と切り合うものが認められる。

遺物は、SK28及び32より奈良時代の所産と推察される杯小片がそれぞれ1点ずつ検出されているに過ぎず、これら土坑の時期を推定するには至らない。

第1表 土坑（SK）計測表

番号	位置	開版	形状	長径	短径	深さ	底面標高	遺物	切り合い	備考
1	I-2	5	不整形	107	6	0.23	207.77	なし	なし	凹凸激しい
2	H-2	5	不整形	86	54	0.22	270.76	なし	なし	
3	H-2	5	不整形	39	23	0.20	270.78	なし	なし	
4	H-2	5	不整形	57	34	0.17	270.75	なし	なし	凹凸激しい
5	G-2	5	円形	28	26	0.07	270.79	なし	なし	
6	G-2	5	長円形	—	30	0.06	270.85	なし	なし	
7	F-1	5	円形	54	53	0.09	270.82	なし	なし	
8	F-2	5	円形	48	47	0.19	270.79	なし	なし	
9	F-2	5	長円形	84	63	0.17	270.81	なし	SX01と切り合う	
10	F-2	5	円形	47	44	0.18	270.74	なし	なし	
11	F-2	5	長円形	66	57	0.24	270.66	なし	なし	
12	F-2	5	長円形	28	23	0.06	270.82	なし	なし	
13	F-2	5	長円形	20	18	0.09	270.75	なし	なし	
14	F-2	5	不整形	22	13	0.08	270.76	なし	なし	
15	F-2	5	円形	22	21	0.04	270.79	なし	なし	
16	F-2	5	長円形	16	14	0.02	270.82	なし	なし	
17	F-2	5	長方形	34	29	0.09	270.72	なし	なし	
18	F-2	5	円形	28	26	0.06	270.76	なし	なし	
19	F-3	5	長円形	—	33	0.14	270.72	なし	SX01に切られる	
20	F-3	5	長方形	—	57	0.04	270.76	なし	SX01に切られる	
21	F-3	5	不明	—	—	0.06	270.74	なし	SX01に切られる	
22	F-3	5	長円形	97	47	0.25	270.49	なし	SX01に切られる	
23	F-3	5	長方形	116	51	0.20	270.53	なし	SX01に切られる	
24	E-2	5	長円形	62	45	0.08	270.76	なし	なし	
25	E-3	5	長円形	83	54	0.23	270.52	なし	なし	
26	E-3	5	長円形	94	13	0.05	270.73	なし	なし	
27	E-3	5	長円形	52	45	0.06	270.78	なし	なし	
28	D-2	6	円形	49	47	0.17	270.7	奈良時代杯口縁片1 図不可	なし	
29	D-2	6	長円形	28	24	0.13	270.69	なし	なし	
30	D-3	6	円形	26	25	0.14	270.73	なし	なし	
31	E-4	6	長円形	—	40	0.03	270.67	なし	SX01を切る	
32	D-4	6	長円形	84	—	0.09	270.61	奈良時代杯口縁片1 図不可	SK32を切る	
33	D-4	6	円形	38	35	0.17	270.53	なし	なし	
34	D-4	6	長円形	54	41	0.05	270.67	なし	なし	
35	D-4	6	長円形	36	27	0.22	270.44	なし	なし	
36	C-3	6	円形	35	33	0.09	270.74	なし	なし	

第2表 SI01出土遺物観察表

遺物No	種別	器形	計測値(cm)			残存率	胎 土	焼成	色 調	調 整 等	備 考
			口径	底形	器高						
1	土師器?	不明 (重か)	—	—	(4.3)	破片	粗、赤褐色子。 砂粒多く含む。 最大10mm程度を含む。	軟質	外面黃褐色 ～内面褐色	非常に粗陋なせいけい。器厚は3.5 mm～7.5mmで不定形ない。口部も直 圓形で底部は圓錐形であるので、 器身の横の幅の出で差がある。 内外面とも不整方向にテクスチャを施す が、口縁内面に粗いヨコハケ整形を施す部分も見受けられる。	遺構一括で取上 された複数の器も含め る。個体と想し て21片の内6片を 示す。
2	土師器	杯	14.6	3.1	4.2	口～体の 1/4欠く	致密・緻細な 砂粒。赤褐色 子多く含む。	良好	褐色	輪轉成形後底部を静止糸切り。体部 下部～底部は圓転窓跡。	
3	土師器	杯	13.9	5.0	4.6	口～底の 4/5缺	やや粗、砂粒。 赤褐色子を含む。	不良	黄褐色～暗 褐色	器身の端部著しく消費形跡を有し ていて、体部下半～底部にかけて圓転窓 跡。	
4	土師器	壺	—	(9.1)	(11.9)	底～体下半 の1/4残	やや粗、砂粒。 金剛砂母等多く 含む。	良好	外周に深い 青褐色～内 面明赤褐色	体部外側タテハケ、内面ヨコハケ。 底部木炭斑。	
5	土師器	壺	(11.1)	—	(13.7)	口～体上半 の1/5残	密、砂粒を多く 含み。赤褐色 子を野々しく含む。	良好	褐色	口部内外ヨコハケ。外側底部タテ ハケ(薄壁の密度)。下部に下方 に現い不整方向ナメハ、頸部内面ヨ コハケ、内体部上半ヨコ～ナメハ。	6と同一個体か
6	土師器	壺	—	(11.7)	(5.3)	体下半の 1/5残	密、砂粒を多く 含み。赤褐色 子を野々しく含む。	良好	褐色	体部外側ナメ、内面ヨコハケ。底部 木炭斑。	5と同一個体か

第3表 SD01出土遺物観察表

遺物No	種別	器形	計測値(cm)			残存率	胎 土	焼成	色 調	調 整 等	備 考
			口径	底形	器高						
1	土師器	皿	(11.6)	—	(2.3)	口～体の 1/4残	緻密・マーブル 状。赤褐色 子多く含む。	良好	褐色	輪轉成形後底部下半をナ メハラクズリ。	
2	土師器	杯	—	4.1	(2.5)	底～体下半 の1/4残	緻密・マーブル 状。赤褐色 子多く含む。	良好	褐色	輪轉成形後底部下半をナ メハラクズリ。底部前面 ハラクズリ。	
3	土師器	杯	—	(4.2)	(1.9)	底～体下半 の1/2残	緻密・マーブル 状。赤褐色 子多く含む。機 械的砂粒を多く 含む。	良好	褐色	輪轉成形後底部下半をナ メハラクズリ。底部回転 糸切り未調整。	
4	土師器	壺	—	—	(2.3)	破片	粗、砂粒 母等多く含む。	良好	外周に深い 青褐色～内 面赤褐色	口部ヨコナメ、体部外側 ナメ、内面ヨコハケ。	
5	土師器	壺	—	—	(2.9)	破片	密、砂粒 母等多く含む。	良好	にぶい赤褐色	口部ヨコナメ、体部外側 ナメ、内面ヨコハケ。	
6	須恵器	壺	—	—	(5.3)	破片	やや粗、砂粒 母等多く含む。	良好	青灰色	外表面にタキメ、内面ナ メ	
7	灰陶陶器	壺	—	(15.3)	(5.6)	底～体下半 の1/4残	粗、白色子。 砂粒多く含む。	良好	灰白色	輪轉成形後外表面糸切りハ ラクズリ付高台。外底部輪 轉ナメ。	外体部横方向に無数の毫 裂。器壁内に気泡含む。
8	灰陶陶器	壺	—	(9.0)	(8.0)	底～体下半 の1/2残	やや粗、白色 子。黑色性 子多く含む。	良好	黄褐色(輪 轉オーリー 色)	輪轉成形後外表面糸切りハ ラクズリ付高台。外底部不 整方向ナメ。	見込みには自然輪付蓋、 器壁内の気泡により器形 歪む。

第4表 出土遺物重量表

遺構名	土師器		須恵器		灰陶陶器		その他	計
	杯 類	甕 類	杯 類	甕 類	碗皿類	壺 類		
SI01	600	1,635	0	0	0	0	0	2,235
SD01	230	220	0	45	0	155	0	650
SK28	5	0	0	0	0	0	0	5
SK32	10	0	0	0	0	0	0	10
SX01	10	10	0	0	0	0	0	20
遺構外	530	360	0	85	0	315	陶器	1,300
計	1,385	2,225	0	130	0	470	10	4,220

凡 例：単位は(g)。計測機器の制約から最小計測単位は5g。

炭化物、礫等は計測していない。

杯類、碗皿類は、供試形態を有するもの。

土師器甕類は、煮沸形態を有するもの。

須恵器灰陶陶器の甕・壺類は貯藏形態を有するもの。

第IV章 総括

今回の調査は実調査面積約300m²と極めて小規模な発掘調査ながら、若草町の歴史を知る上で一定の成果をあげることができた。

まず第一に、近年まで常習洪水河川であり、その横断に隧道をも有する典型的な天井川であった滝沢川に接する場所から古代の遺構が検出されたことが挙げられる。通常存在しないだろうと思われた場所からの遺構の発見はそれ自体成果と言える。扇状地性河川の流域においては、その河川の流路の変遷をも念頭に置いて遺跡把握を行なう必要があることを改めて思い知らされる。また洪水流の度重なる影響を受けてもなお、遺構が遺存することが本遺跡や御崎蔵入遺跡（田中1999）で検証されたことにより、この地域における今後の遺跡保護行政においては、現在の包蔵地外についても積極的に試掘調査を行っていく必要があることを暗示する。

さらに今回の調査では数こそ少ないものの、本町にこれまで蓄積の少なかった8世紀の所産となる資料を得ることができた。本遺跡に近接する甲西町域では弥生時代から古墳時代後期の遺物の散布が認められ（註1）、今回の調査に周辺の新居道下遺跡（米田1998）、枇杷B遺跡（清水1998）、溝呂木道上第5遺跡（田中1998b・1998c）などの調査成果を併せて考えれば、御勅使川扇状地扇端部に連綿と人間の営為の痕跡を辿ることができる。

御勅使川扇状地先端部にベルト状に濃密な埋藏文化財包蔵地が存在するのは当該町村の遺跡地図を見れば明らかである。今回の調査区もこの大きな意味での扇端部遺跡群の末端に含まれよう。

しかしながら近年の発掘調査成果を基に詳細に検討すれば、この扇状地末端部の遺跡群は現在の若草町十日市場集落の北端付近を境に、その南北で様相が異なる2帯のベルトに分けられるように思う。

即ち南側の帯として向第1遺跡を含め新居道下遺跡、枇杷B遺跡、溝呂木道上第5遺跡など、御勅使川扇状地の最も末端に沿うように立地する一群、北側の帯として十五所遺跡（米田1999）、村前東A遺跡（三田村他1999）、角力場第2遺跡（田中1998a）、寺部村附第6遺跡（宮沢2001）、寺部村附第12遺跡（田中2001）など、より扇寄りに占地する一群である。

本町の遺跡の立地・変遷については保坂康夫氏が詳細に検討しているが（保坂1990）、近年の発掘調査事例から微視的に捉えた場合、今回の調査区を含む前者領域（扇端部南半）における調査成果からは、この領域に弥生時代以降連続と集落の営まれていたことが明らかになってきている。また概してこれら集落の継続時期は長く、その多くが時代を跨って検出される傾向を認めることができる。

領域の北端に接する寺部村附第6遺跡（宮沢2001）から古墳時代中期の円形周溝墓が検出されているものの、これまで広義の御勅使川扇状地扇端部における発掘調査においては、集落址として古墳時代中期以降～平安時代初頭以前の遺構が検出された遺跡はこの領域に限られており、本町遺跡台帳によっても、やはりこの領域以外で該期のものと明示し得る遺物は、殆ど採集されていない。

この状況は、弥生時代に入って遺跡が出現した後、東海系土器を伴って数・領域とも爆発的インフレーションを起こした古墳時代前期の集落が突然断絶し、平安時代前半（9世紀初頭）以降再び突如として

再出現する後者領域に属する遺跡群とは対照的な様相を呈するように思う。この後者領域においては集落址として、古墳時代中期から奈良時代、さらに9世紀初頭以前の遺跡が欠如し、且つ集落の継続時期が短く断片的である傾向が認められる。

後者領域の旧景は、表層を砂礫に覆われ平坦な果樹畠が続く現在の風景とは大きく異なり、相当起伏に富んだ、あたかも丘陵地帯を思わせる地形であったことが一連の発掘調査によって明らかになってきている。また、村前東A遺跡において行われたプラントオバールの分析から、古墳時代前期における本領域は「ヨシなどが生育する湿地あるいは水域の存在が予想される。また、ウシクサ族（ススキやチガヤなど）やネザサ節などが生育する開けた草地の環境も付近に広がっていたと推測される」（鈴木1999）とされ、こちらも現況からは大きくかけ離れ、水資源豊かな風景を見せていたことが指摘される。この豊かな立地条件が、本地域における古墳時代前期の大きなインパクトを支えたものと推察される。

砂礫の堆積という事象から、このような立地に営まれた古墳時代前期の集落群が、これ以後断絶してしまう要因としてまず想起されるのは気候環境の変動であろう。外山秀一氏によれば、山梨県を含む中部から近畿、四国までの地域の沖積平野に位置する遺跡の堆積層の検討から地形の変化や土地条件の不安定な時期が、弥生時代前中期から中期初頭、弥生時代後期から古墳時代前期、古代末、15・16世紀の4時期存在するという。

この内、弥生時代後期から古墳時代前期の変化について外山氏は「弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に微凹地や溝状遺構が洪水堆積物によって埋積を受けた。こうした状況は、当時の自然堤防帯の河川流域や三角州地帯における地層の堆積ならびに地形の形成、さらには人々の生活に少なからず影響を及ぼしたと考えられる」（外山1994）としており、この環境の変化が河川の營力の増大を招いて扇状地を砂礫によって埋没せしめたのであれば、洪水被害や水資源の枯渇等により古墳時代中期以降遺跡が断絶し、この領域において人間の営為の痕跡が乏しくなったことは十分に考えられる。

しかしながら、このような領域でも9世紀前半以降、突然再び集落が爆発的に増加する傾向が見て取れる。これは、稻作の伝播に伴って扇状地辺縁部に移住した人々が、扇尖部よりも環境的変化が相対的に少なかったこの領域で、その後も連続と集落を営み、南面する2次扇状地上に条里制を施工するなどして力を蓄え、平安時代前半に至って、技術革新や汎山梨の集落の拡大傾向^(註2)という社会的要因に裏付けられるなかで扇尖部への進出を試み、または扇状地辺縁の村々が持っていたであろう恒常的扇尖への開拓志向が、このような技術革新、社会的状況の変化などを伴って結実したことを物語るものかもしれない。

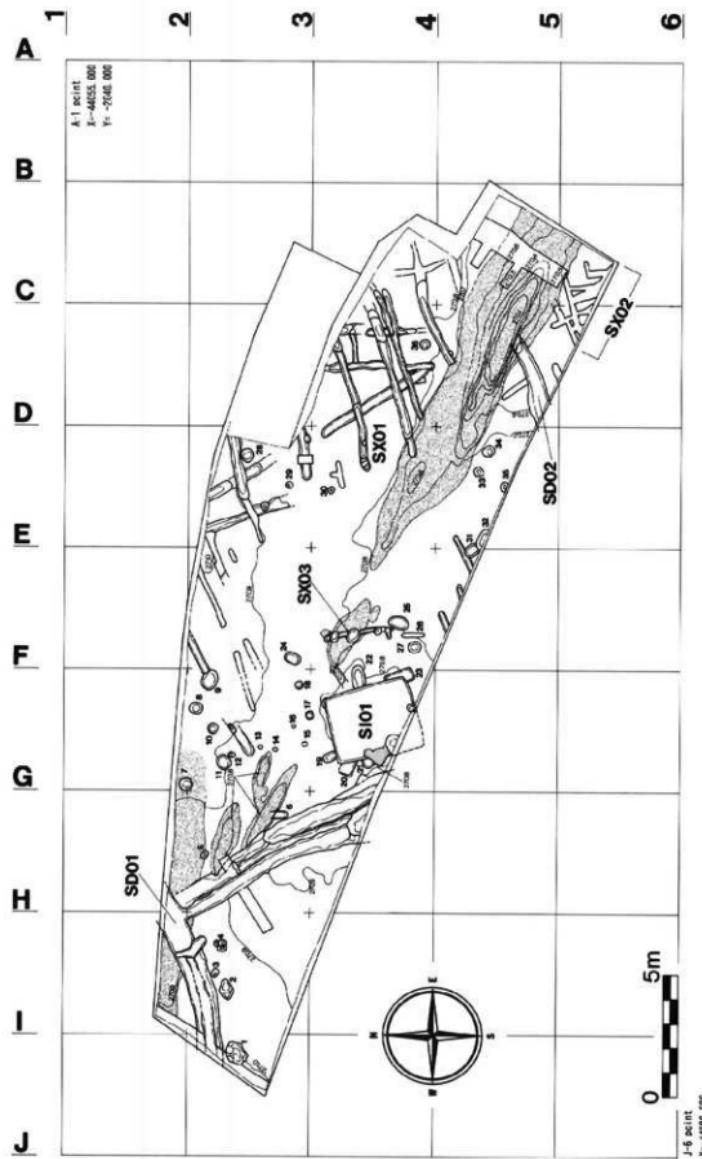
このことは、これによって、後の豊かな生活基盤が構築され、延いては古代末に加賀美氏の定着を招いて、この地域の中世繁栄の礎を築いた歴史的過程を示しているのかもしれない。今回の調査を踏まえた上で、今後調査事例を蓄積し検証していきたい。

註1：甲西町教育委員会広瀬和弘氏の御教示による。

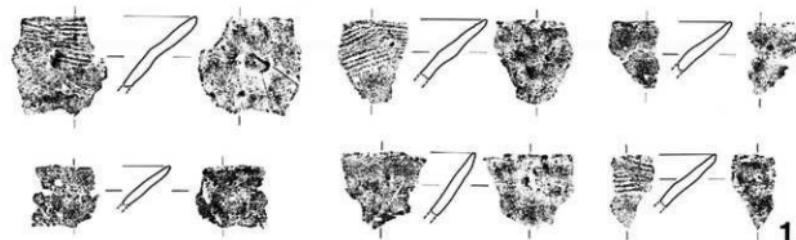
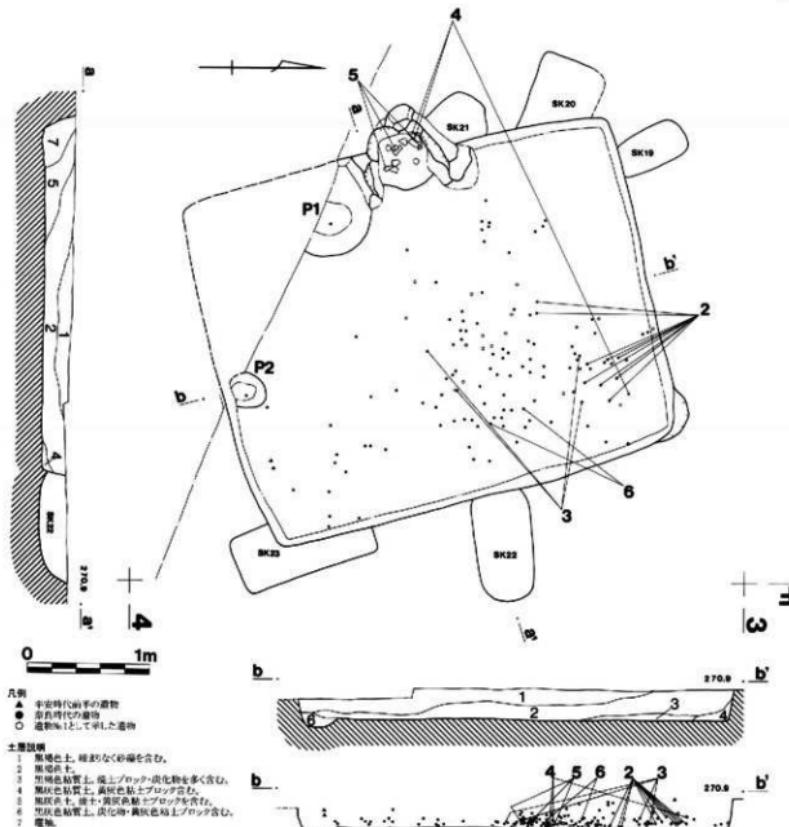
註2：（保坂1997）・（荻原1986）などで指摘される。

参考引用文献

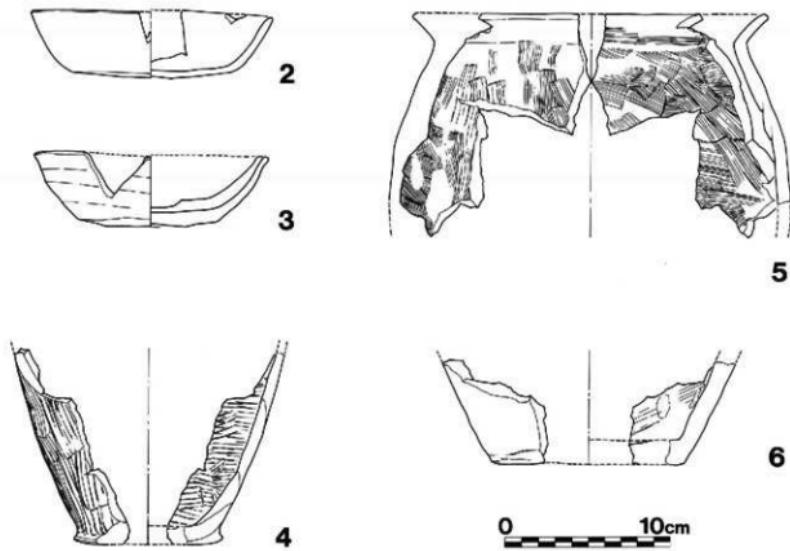
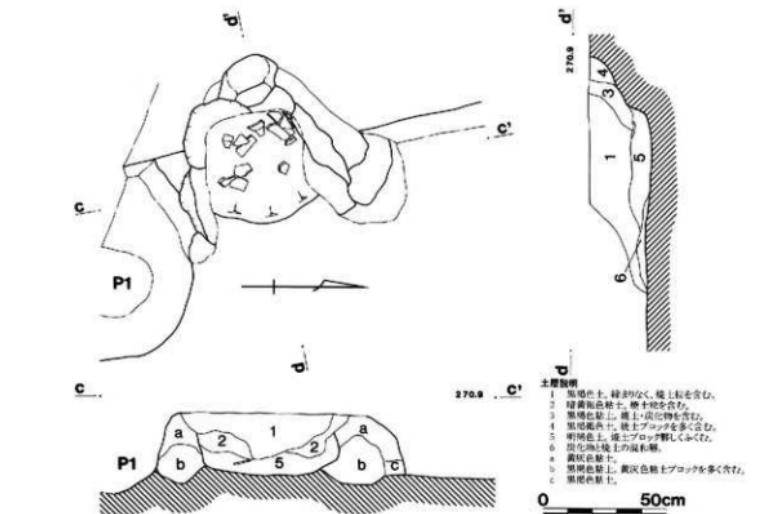
- 櫛原功一他 1992 「宮ノ前遺跡」 菲崎市遺跡調査会
- 小林健二他 1997 「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 山梨県教育委員会
- 斎藤秀樹 2000 「野牛島・大塚遺跡」 八田村文化財調査報告書第2集 八田村教育委員会
- 斎藤秀樹 2001 「櫻原・天神遺跡」 八田村文化財調査報告書第3集 八田村教育委員会
- 清水 博 1998 「枇杷B遺跡」 柳形町文化財調査報告書第17集 柳形町教育委員会
- 鈴木 茂 1999 「第7章第1節 村前東A遺跡I・II区のプラントオパール」「村前東A遺跡」 第157集 山梨県教育委員会
- 田中大輔 1998a 「角力場第2遺跡」 若草町埋蔵文化財調査報告書第1集 若草町教育委員会
- 田中大輔 1998b 「溝呂木道上第5遺跡」 若草町埋蔵文化財調査報告書第2集 若草町教育委員会
- 田中大輔 1998c 「溝呂木道上第5遺跡(第II地点)」「山梨考古」第70号 山梨県考古学協会
- 田中大輔 1999 「御崎蔵入遺跡」「山梨考古」第74号 山梨県考古学協会
- 田中大輔 2001 「寺部村附第12遺跡」「山梨考古」第76号 山梨県考古学協会
- 外山秀一 1994 「プラント・オパールからみた稻作農耕の開始と土地条件の変化」「第4紀研究」33-5
- 長沢宏昌他 2000 「富士見一丁目遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第167集 山梨県教育委員会
- 中山誠二 2000 「二本柳遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第183集 山梨県教育委員会
- 新津 健他 1992 「二本柳遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第72集 山梨県教育委員会
- 新津 健他 1997a 「大師東丹保遺跡I区」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第131集 山梨県教育委員会
- 新津 健 1997b 「中世集落研究の視点—立地からみた画期と景観様相—」「山梨県考古学協会誌」第9号
- 新津 健 2000 「宮沢中村遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第181集 山梨県教育委員会
- 萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」「山梨県考古学論集」 I 山梨県考古学協会
- 広瀬和弘 1997 「村内遺跡」 甲西町教育委員会
- 保坂和博 1997a 「油田遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第130集 山梨県教育委員会
- 保坂和博 1997b 「大師東丹保遺跡IV区」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第133集 山梨県教育委員会
- 保坂康夫 1990 「第1章 原始古代の遺跡」「若草町誌」
- 保坂康夫 1997 「山梨県下の遺跡・住居址数変動と通史的理解」「研究紀要」13 山梨県埋蔵文化財センター
- 保坂康夫他 1998 「山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第152集
- 三田村美彦他 1999 「村前東A遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第157集 山梨県教育委員会
- 宮沢公雄 2001 「寺部村附第6遺跡」「山梨考古」第83号 山梨県考古学協会
- 山下大輔他 2000 「前原G遺跡」 柳形町文化財調査報告書第19集 柳形町教育委員会
- 山下孝司 1989 「奈良時代における甲斐の土器編年」「山梨県考古学論集」 II 山梨県考古学協会
- 米田明調 1991 「七ツ打C遺跡発掘調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第60集 山梨県教育委員会
- 米田明調 1997 「向河原遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第129集 山梨県教育委員会
- 米田明調 1998 「新居道下遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第147集 山梨県教育委員会
- 米田明調他 1999 「十五所遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第158集 山梨県教育委員会
- 若草町編 1990 「若草町誌」



調査区全体測量図

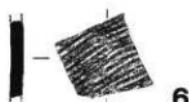
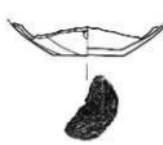
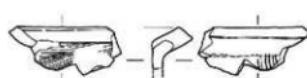
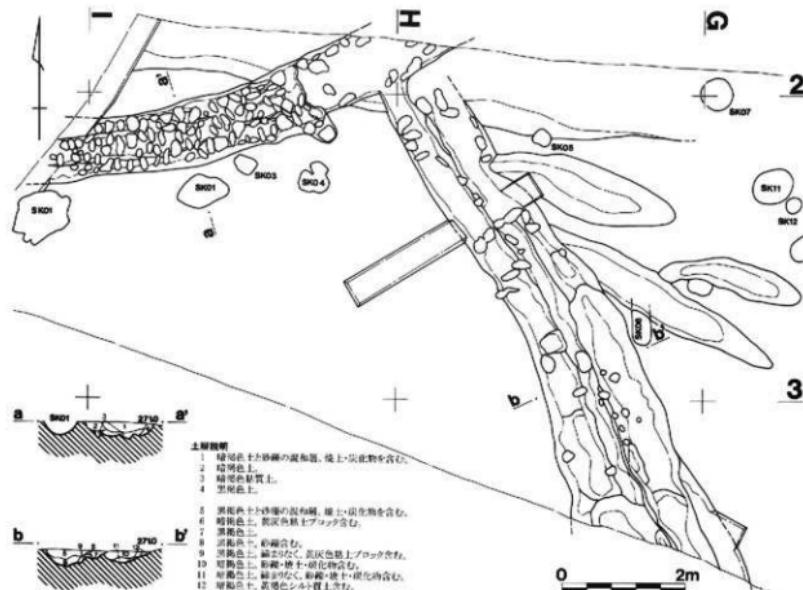


SI01測量図/SI01出土遺物実測図(1)

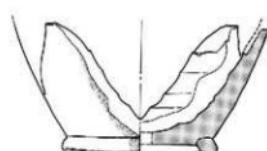


SI01窓測量図/SI01出土遺物実測図(2)

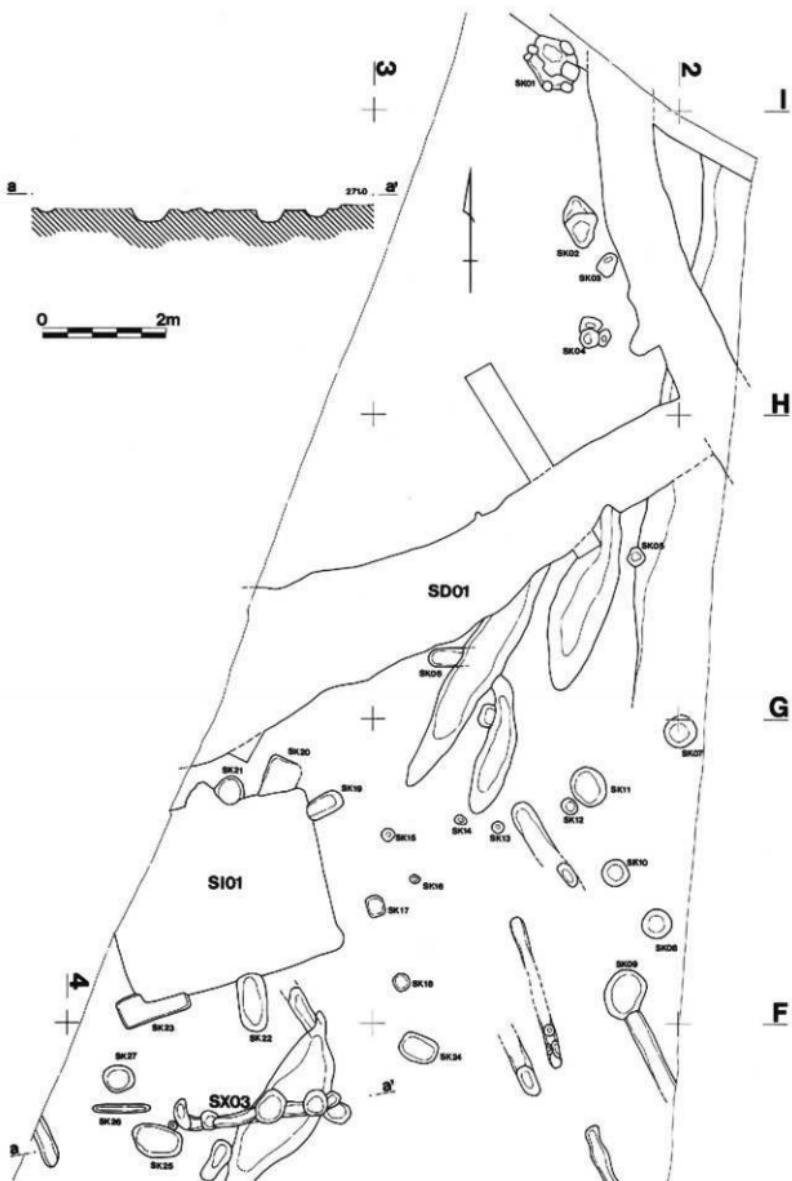
図版 4



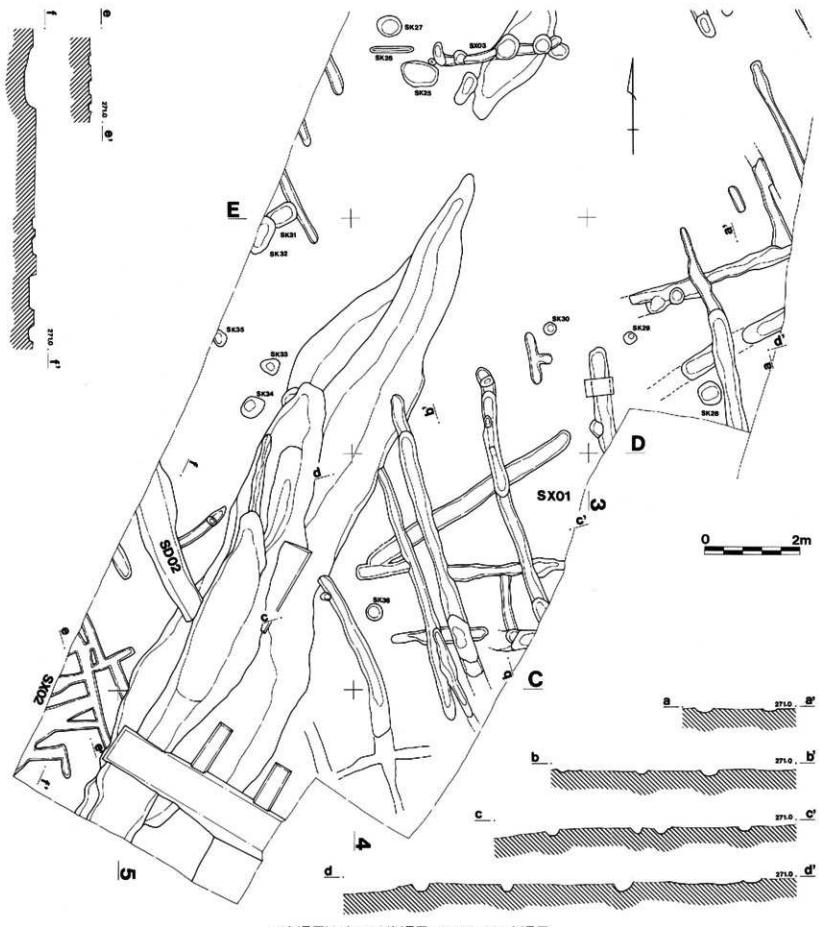
0 10cm



SD01測量図／SD01出土遺物実測図



SK測量図(1) / SX01(1)測量図・SX03測量図



SK測量図(2) / SX01(2)測量図・SX02・SD02測量図



調査区遠景（東より）



調査区全景



SI01 (東より)



SI01電 (東より)



SD01 (西より)



SD01 (北西より)



SX01



SX02



調査区（西より）



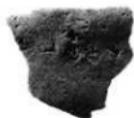
SI01・SX03造構確認状況（南より）



2



3



1

SI01出土遺物



7



8

SD01出土遺物

報告書抄録

ふりがな	むかいたい いせき
書名	向第1遺跡
副書名	富士川西部広域農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ	若草町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者	田中大輔
編集機関	若草町教育委員会
所在地	〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部598-1 TEL 055-283-8311
発行年月日	西暦2002年3月10日

ふりがな	むかいたい いせき	
所収遺跡	向第1遺跡	
ふりがな	やまなしけんなかまぐんわかくさちょうとうかいもば846-2	
所在地	山梨県中巨摩郡若草町十日市場846-2	
市町村	19389	
コード	41075	
1/25000地図名	小笠原	
北緯	35°36'10" (日本測地系)	
東経	138°28'37" (日本測地系)	
調査期間	20000724~20000914	
調査面積	303m ²	
調査原因	道路建設	
主な時代	奈良時代/平安時代	
主な遺構	竪穴住居址1軒 溝状遺構2条 歟状遺構2群	不明遺構1基 土坑36基
主な遺物	土師器 杯・皿・甕 須恵器 甕	灰釉陶器 壺
特記事項		

発行日 2002年3月10日
発 行 若草町教育委員会
〒400-0337
山梨県中巨摩郡若草町寺部598-1
TEL 055-283-8311
印 刷 ほおずき書籍株
〒381-0012
長野県長野市柳原2133-5
TEL 026-244-0235

